

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 196

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 3901. 【パリ小旅行記】今朝方の夢
- 3902. 【パリ小旅行記】耳・心・魂を楽しませる音
- 3903. 【パリ小旅行記】Gare Montparnasse駅の構内より
- 3904. 【パリ小旅行記】ラヴェル博物館を訪れて
- 3905. 【パリ小旅行記】滞在三日目の計画と今朝方の夢について
- 3906. 【パリ小旅行記】昨日購入した五冊の楽譜について
- 3907. 【パリ小旅行記】Ariosoという楽譜専門店にて
- 3908. 【パリ小旅行記】ドビュッシー博物館を訪れて
- 3909. 【パリ小旅行記】パリ滞在の四日目の朝に
- 3910. 【パリ小旅行記】国立ピカソ美術館を訪れて
- 3911. 【パリ小旅行記】ピカソのあり方から学ぶこと
- 3912. 【パリ小旅行記】パリ滞在最終日に見た夢
- 3913. 【パリ小旅行記】今朝方の夢の続き
- 3914. 【パリ小旅行記】パリで見た光と闇
- 3915. 【パリ小旅行記】オランダでの滞在延長
- 3916. 【パリ小旅行記】スキポール空港にて
- 3917. パリから戻ってきた夜の夢
- 3918. 新たな人生:食生活の見直し
- 3919. 喪失感と人間発達
- 3920. 岐路

パリ滞在の二日目の朝を迎えた。昨夜は普段よりも少し遅く、午後十時半頃に就寝し、今朝は六時前に起床した。部屋の室温が少しばかり低かったので、体を温めるためにも、まずは浴槽に浸かった。

今日もまず最初に、今朝方見ていた夢について振り返っておきたい。昨夜の日記で指摘している通り、旅というのは、自分の内側に様々な感覚を流し込んでくるものであり、そうした感覚を整理・統合する意味で、十分な夢を見てもいいと思うのだが、実際にはそうでもないようだ。その証拠に、今朝方は夢を見ていながらも、そのほとんどを覚えていない状態になっている。覚えている・覚えていないの問題ではなく、そもそも夢を見ているという自覚の絶対量が少ないのだ。

とはいえ、幾分覚えている箇所もあるので、それらについて書き留めておきたい。夢の中で私は、体育館のような場所で、フットサルのシュート練習をしていた。いや、厳密には、誰か別の人間がシュート練習をしているのだが、どういうわけか、自分の感覚はその人の中にあり、あたかも自分がシュート練習をしているかのように知覚されていたのである。

周りには何人か見知らぬ人たちがいて、彼らの一人はコーチのようだった。そのコーチが、シュート練習をしている人に向かって、「一直線にシュートを打つことはできるか？」と尋ねてきた。それに対してその人は、「できるかわからないですが、やってみます」と答えた。実際にボールを蹴る意思を脳に伝えるのは私であり、どのように身体を動かすかの指令を脳に送るのも私だった。そこで私は、ボールを一直線に蹴るための指令を脳に送り、その人は見事にまっすぐにボールを飛ばした。

コーチのような人が、もう一回見せて欲しいと述べたので、全く同じことをもう一度やってみた。もちろん、それも難なく成功した。コーチを含め、周りにいたその他の人たちも、ボールが綺麗に一直線に低く飛んでいく姿に感動したようであり、私はサービス精神を發揮して、さらにもう一度ボールを一直線に蹴るように、その人の脳に指令を送った。三度目も見事に成功したところで夢の場面が変わった。今朝方はそのような夢を見ていた。一度深夜の二時に目が覚める直前には、別の夢を見ていたように思うが、今はもうその夢の内容に関する記憶はほとんどない。断片的に覚えているとすれば、知人の女性かまだ会ったことのない女性と談笑していた場面があったことを覚えている。

---

今日はパリ滞在の二日目であり、午前中にラヴェル博物館に足を運ぶ。これからもう一度地図を確認し、ホテルからの経路を確認する。市内から列車に乗って、ラヴェル博物館のある最寄駅まで行き、そこから20分から30分ほど歩けばラヴェル博物館に到着する。天気を心配していたのだが、今日の日中はなんとか曇りで持ちこたえることができそうである。

昨日までは雨マークが付いていたが、今朝方天気予報を確認すると、天気は回復の方向に向かうようだ。今はまだ雨が少し降っているが、もう30分ぐらいすると、天気がどんどん回復の方向に向かっけいきそうな様子が窺える。

ラヴェル博物館とその周辺をゆっくりと巡り、その後市内に戻ってきて時間があれば、昨日訪れる予定だった楽譜専門店に足を運びたい。パリ滞在の二日目も充実した一日になるだろう。パリ:2019/3/1(金)06:53

#### No.1724: Revisit to Paris

I went to the Maurice Ravel museum today. As well as Grieg and Sibelius, I knew that Ravel liked a quiet environment and loved nature. Paris, 22:03, Friday, 3/1/2019

#### 3902.【パリ小旅行記】耳・心・魂を楽しませる音

早いもので、今日から三月を迎えた。パリで三月を迎えることになるとは思ってもみなかったが、いつの間にか弥生がやってきたことには感慨深いものがある。春の訪れの足音を、ここパリでも聞くことができる。

先ほど、ラヴェル博物館までの道を調べた。まずはパリ北駅から市内の駅に向かい、そこで乗り換えをする。一度の乗り換えで、ラヴェル博物館の最寄り駅に到着することができる。ただし、この電車は一時間に一本しかないようなので、その点にだけは注意したい。それは帰りも同様である。

パリに足を運んだのは今回が二度目だが、関心が全くないためか、今回もエッフェル塔やヴェルサイユ宮殿を見学しに行くことはなさそうだ。そもそもヴェルサイユ宮殿の名前すら忘れていたのだが、昨日受付の方から頂いた地図にその宣伝が掲載されていたのでその時に初めて思い出した。

---

昨日、スキポール空港からパリに向かう列車の中で、デスクトップ上に保存していた論文の類を一気に読み進めていった。経営学と発達科学を架橋させた論文、教育哲学に関する論文、音楽理論に関する論文など、かなり雑多なものを読み進めていった。おかげで、デスクトップが随分と綺麗になった。もう少し論文が残っているため、それは帰りの列車の中で読み進めていきたいと思う。また、いくつか印刷をしてじっくり読むべき論文も混じっていたため、それらについてはどこかのタイミングで印刷をしたいと思う。

改めて音楽というのは、耳を楽しませ、心を楽しませ、魂を楽しませるためにあるのだということを感じる。それらをどのようにどれほど楽しませるかの理論体系が音楽理論なのだろう。音楽理論を学ぶ意義をここに見出せそう。耳、心、魂を楽しませる音楽を作るためにそれがあるという認識を絶えず持ちながら、これからも音楽理論を少しずつ学んでいきたい。

今、屋根から滴る雨音が聞こえて来る。もう雨は止んだはずであり、おそらくは、先ほどまで降っていた雨が屋根から滴り落ちてきているのだと思う。その音に耳を傾けていると、意識がくつろいでいく。自然音の中には、一音成仏をもたらすものも多くある。雨の音、小鳥の鳴き声、そよ風の音しか。一方、人工音に関しては、どうもそうした意識状態をもたらさないものが多いことに気づく。ここからも、自然の偉大さを知り、人間がそうした音を作ることの難しさを知る。

今日もパリの街中を歩いている最中に、様々な音が聞こえてくるだろう。すでに想像しているが、ラヴェルが生活をしていた場所の周辺は、優しく美しい自然音が溢れているに違いない。今後は街中を歩く際には、街の景観のみならず、人工音の性質にも意識を向けてみようと思う。人工音の中で心地よく聞こえるものがあるとなればそれはどのようなものなのか、有害だと思える音の性質はいかようなものなのか。そうした観点を持って街を歩くことにする。パリ:2019/3/1(金)07:46

#### No.1725: Paris After the Rain

It stopped raining. I'll leave the hotel shortly to go to two music sheet stores. Then, I'll visit the Debussy museum. Paris, 09:03, Saturday, 3/2/2019

---

### 3903.【パリ小旅行記】Gare Montparnasse駅の構内より

今私は、パリ市内のGare Montparnasseという駅にいる。これから、ラヴェル博物館の最寄の駅であるモンフォール・ラモリーという駅に向かう。

ホテルを早めに出発し、メトロに乗ってメトロ専用のMontparnasse駅までは無事にこれたのだが、そこから乗り換えをするために一度地上に出て、今いる駅に来るまでに少々手間取ってしまった。外は小雨が降っており、それでいて風が強く、手にコーヒーを持っていたことから、地図を見ながら歩くことが難しかった。そうしたこともあり、予定よりも遅くこの駅に到着してしまい、当初乗る予定だった列車を逃してしまった。駅に向かう途中でそうなるであろうことが予想できたため、もはや焦ることなく駅構内に入った。

乗る予定の列車は一時間に一本のものなので、今は駅構内の休憩所の椅子に腰掛けながらこの日記を書き留めている。パリ北駅にせよ、今いる駅にせよ、整備が行き届いており、内装は比較的綺麗だ。ただし、市内のメトロ駅は大抵汚く、車内の中も清潔感さはほどない。

今から数ヶ月前にボストンを訪れた時に、ボストン市内の地下的駅も随分と汚れている印象を持った(そこからさらに数ヶ月前に訪れたロンドンの地下鉄も似たようなものであった)。地下鉄に関しては日本の方が圧倒的に清潔な印象を与える。パリもボストンも、地下鉄を綺麗にするためにお金を使おうという発想がないのかもしれない。そのようなことをぼんやりと考えながら列車を待っている。列車に乗るのが一時間遅れたことに伴い、駅構内の売店で昼食を購入しておいた方がいいかもしれない。

昨夜の夕食の件があるため、あまりレストランで食事をしたいとは思わなくなってしまった。今腰掛けている場所の直ぐ近くにコンビニのような小さなスーパーがあるため、そこでサンドイッチか何かを購入したいと思う。

これから向かうモンフォール・ラモリー駅に到着してからは30分ほど歩く必要があるため、事前に軽食を摂っておくのもいいだろう。これから向かう駅からラヴェル博物館までの道のりを調べてみると、随分と田舎道を歩くことになりそうだ。

---

田んぼ畑が広がっているような道をゆっくりと歩いていく。博物館近くには教会があるらしく、それはその街のシンボルのようだ。そこは本当に小さな街であるから、とても落ち着いた環境であることを期待する。

コーヒーを飲んでぼんやりとしていたり、駅構内の様子や、行き交う人々の様子を観察していると、列車が到着するまであと30分ほどになった。一時間というのは本当にあっという間なのだということがわかる。もう少し時間があるので、昨日書いた日記を編集したり、持参した作曲ノートを読み返すことを行いたいと思う。ラヴェル博物館とその周辺を散策することにどれだけ時間を充てるかわからないが、三時半あたりの列車でパリ市内に戻ってこようと思う。

体力がどれだけ残っているかを見て、そこから楽譜専門店に足を運び、夜ホテルの自室に戻ってきたら一曲ほど曲を作りたいと思う。結局今朝は曲を作る時間を取ることができなかったなので、帰ってからゆっくりと時間を取って作曲をしたい。パリ:2019/3/1(金)10:29

### 【追記】

私は、メトロ専用のMontparnasse駅から一度地上に上がってGare Montparnasse駅に向かったのだが、帰りにわかったのは、地上に出る必要はないということだった。パリ:2019/3/2(土)19:44

### No.1726: An Etude of Drizzle

Although I thought it stopped raining, it seems to still drizzle. After I keep a journal, I'll leave the hotel for a music sheet store. Paris, 09:33, Saturday, 3/2/2019

### 3904.【パリ小旅行記】ラヴェル博物館を訪れて

今、モーリス・ラヴェルが1921年から1937年に生涯を閉じるまで生活をしていたモンフォール・ラモリーの駅でこの日記を書いている。

今日の早朝は時折小雨が降っていたが、パリ市内からモンフォール・ラモリーの駅に到着する頃には雨が止み、駅からラヴェル博物館までは傘をささずに済んだ。駅からラヴェル博物館までは歩いて30分以上かかるが、目的地に辿り着くまでの道は大変のどかで清々しかった。

---

ラヴェル博物館のウェブサイトを確認した際に、この博物館に入るためには事前予約が必要であり、それは現地でも可能であると聞いたので、まずは観光案内所に向かった。しかし、携帯の地図上に保存していた場所はどうやら観光案内所ではなく、一軒の古びたホテルであった。最初私は、ホテルの看板を見ずに建物の中に入ったため、一歩足を踏み入れるまではそこがホテルであると気付かなかった。どうやらそこが観光案内所ではないことがわかると、私はすぐにホテルを出た。

だが、観光案内所がどこにあるのかを探す必要があり、そこで少し立ち往生していると、ホテルの受付の中年女性がタバコを吸いに外に出てきたため、彼女に聞いてみるとことにした。すると、とても親切に、フランス語混じりの英語で観光案内所の場所を教えてくれた。「ちょっと待ってて」と述べてその方はホテルの中に戻り、しばらくして戻ってくると、ラヴェル博物館のパンフレットと街の地図を私に渡してくれた。

その方の親切な行動に私はとても感謝をし、お礼を述べた。いただいた地図を頼りに観光案内所に向かうと、ちょうど昼食どきだったためか、案内所の明かりが消されており、中には誰もいなかった。フランス人は昼食を大切にするという話を聞いたことがあり、おそらくランチ休憩だろうと思った私は、ちょうど自分もお腹が空いていたので、レストランを探すことにした。当初の予定では、パリ市内の駅でサンドイッチを購入しようとしたが、あまり美味しそうではなかったのでそれを買わずじまいであった。

昨日のディナーのタイ料理屋での失敗があったため、今回は慎重にレストランを選んだ。店の中に真っ当な格好をした客が何人かいることを手掛かりにし、良さそうなフレンチレストランに入った。そこは街のシンボルである教会のすぐ近くにあるレストランだ。店内に入ると、すぐに店員に席を案内してもらい、メニューを眺めた。

周りの人が食べているものを見る限り、このレストランは当たりであることがわかった。私は、グリーンサラダと魚料理を注文することにした。席について、ラヴェル博物館のパンフレットを眺めていると、しばらくして料理が運ばれてきた。見るからに美味しそうな料理であり、実際に美味であった。

観光案内所の職員がランチ休憩を終えるまでもう少し時間があるだろうと思ったので、食後のコーヒーとしてエスプレッソを注文し、それをゆっくり飲んだ。このレストランは、店員の対応、そして料理の味

---

ともに大変満足できた。レストランを後にした私は、教会の全景を立ち止まってしばらく眺め、その後、観光案内所に向かった。

観光案内所に再び行くと、今度は明かりが灯っており、中に職員が一人いた。挨拶をしてすぐに、ラヴェル博物館の予約をしたいとお願いしたところ、なんと平日は一切開いておらず、土日しか中を見学できないようだった。ウェブサイトの情報を私は誤解していたようであり、中を見学することができなくて残念だったが、外観とその周りの雰囲気確かめに、ラヴェル博物館に向かった。

目的地に到着してみると、周りは小鳥の鳴き声が聞こえる静かな場所だった。そして驚いたことに、ラヴェルは人一倍小柄だったためか、そこはとても小さな家だった。

ラヴェルの友人であった指揮者のマニユエル・ロザンタールは、ラヴェルの家のことを「あずま屋ほどの小さな家。その外観は、まるで無造作に切り取られたカマンベールチーズのようだ」と形容している。ロザンタールの指摘どおり、極めて小さい家であることに私は驚いた。しかし、家からの眺めは素晴らしく、街のシンボルの教会を見下ろすことができ、近くの牧場を眺めることができる。

私はしばらく、ラヴェルが吸っていたであろう同じ空気を吸いながら、同じく彼が眺めていたであろう景色をぼんやりと眺めていた。ラヴェルが作曲に集中するために、このような静かな生活環境を選んだことには大変共感する。

私はこれまで、数多くの作曲家の旧邸を訪れたが、自然を感じられる場所で曲を作った作曲家と、都市部で生活をしながら曲を作った作曲家に分かれるように思う。前者に関しては、ラヴェル以外にも、ノルウェーのグリーグや、フィンランドのシベリウスなどがいる。確かに、ラヴェルが生活した場所も静かで趣があったが、より豊かな自然の直ぐ近くで曲を作っていたのはグリーグやシベリウスだろう。

以前の日記の中で、どのような環境に身を置くかによって、環境からのフィードバックが異なり、それによって内側から形となって外に出てこようとするものが必然的に異なることについて言及していたように思う。まさにラヴェルは、先ほど足を運んだモンフォール・ラモリーの街が喚起する固有の感覚を通じて作曲をしていたのだろう。

---

今後ラヴェルの曲を聴く際には、今日見た光景、およびそこで感じた様々な感覚が喚起されるに違いない。今日の体験は、これからラヴェルの曲を深く理解していくための貴重な原体験になったと思う。モンフォール・ラモリー:2019/3/1(金)15:16

### 3905.【パリ小旅行記】滞在三日目の計画と今朝方の夢について

パリ滞在の三日目の朝を迎えた。目覚めた瞬間に、屋根から雨が滴る音が聞こえてきた。天気予報を確認すると、今日は午前11時頃まで雨のようであり、そこからは天気が回復するようだ。

今日の計画としては、午前中に、宿泊先のホテルから歩いて30分ほどのところにある楽譜専門店に行く予定である。ちょうど二店の楽譜屋が隣接しており、それらの店でゆっくりと楽譜を吟味する。

午後からは、ドビュッシー博物館に足を運ぶ予定だが、土曜日は三時からしか開いていないため、一件目の楽譜屋でゆっくりと楽譜を選んだ後に、近くで食事をし、その後にもう一軒の楽譜屋に行ってから博物館に向かいたい。

地図を調べてみると、楽譜屋からドビュッシー博物館までは、電車で40分弱かかる。一度乗り換えをして、博物館に到着したら、そこでゆっくりと時間を過ごしたい。事前情報によると、そこはドビュッシーの生家だが、二歳までしか住んでいなかったとのことである。また、博物館の入館料は無料だが、見学できるのは二つの部屋のみとのことである。どれだけゆっくりしても、その博物館に滞在するのは一時間ほどになりそうだ。

今日は楽譜専門店とこの博物館だけを訪れる予定なので、博物館を訪れたら、その周辺を散策し、今日は早めにホテルに戻ってこようと思う。書き残している日記が多々あり、また今日は作曲をする時間も十分に取りたい。

旅の最中は当然ながら、足を運びたい場所で過ごす時間を多く確保するようにしているため、作曲をするゆとりはそれほどない。また、ホテルの自室の机に関しても、スペースの都合上、楽譜を広げながら作曲をするのが難しいことと、そもそも普段楽譜を見やすくするために活用している書見台を持ってきていないのだから、曲は作りにくくて当然だ。しかしそうした環境の中でも、やはり毎日一曲

---

は作りたいと思う。今日はこれから、昨夜作った曲を編集し、その後にまた短めの曲を作りたいと思う。

土曜日を迎えたパリ。雨脚も弱くなり、これから天気が徐々に回復していくことが期待される。

今朝方の夢をまだ振り返っていなかったなので、少しばかり振り返りをしておきたい。ただし、昨日と同様に、今朝方の夢についてはほとんど覚えていないので、夢の中の断片的な場面と、どのような感覚があったかだけを書き留めておきたい。

夢の中で私は、昨年よりオランダで生活を始めた日本人の知人の方と談笑をしていた。何について話していたのかは定かではないが、穏やかな雰囲気の中で、和気藹々と対話し、楽しいひと時を過ごしていたのを覚えている。その後夢の場面が変わり、何か不安を感じさせる状況を想定している自分がいたのと、そこから一転して、笑いを感じるような場面もあった。今朝方の夢について覚えているのはそれぐらいである。

二つの異なる感覚が夢の中で現れたが、そうした感覚すらも何かしらのシンボルと言えるのだろうか。今回は、不安や楽しさ、ないしは笑いを感じていた対象が何なのかを覚えていないが、もしかすると、対象そのものは確かにシンボルであるが、そうしたシンボルから喚起される感覚もまたシンボルとして見なすことができるかもしれない。ここに、シンボルの重層的な構造を見て取ることができる。

旅の最中は、日中に様々な刺激を受けており、五感を通じて大量の情報が自分の内側に流れ込んでいるはずなのだが、夢をあまり覚えていないというのは何故なのだろうか。間違いなく、大量の感覚情報を夢として整理・統合する必要があるはずなのだが、鮮明な夢を見ていないというのは不思議だ。

もしかすると、脳が夢を見させる情報量以上のものが内側に流れ込んできており、旅の最中に得られた感覚情報は、旅を終えた後に徐々に整理・統合が進んでいくのかもしれない。

昨日は、ラヴェル博物館からの帰りの列車の中で、少しばかり仮眠を取っていた。その最中には、サトル意識状態に入り、千変万化する無数の心的イメージを知覚していた。このように、間違いなく大量の感覚情報が自分の内側に流れ込んできていることは確かであるため、それらは旅を終えて

---

から徐々に整理されていき、少しずつ自分の内側に統合されていくのだろう。パリ:2019/3/2(土)  
07:42

### No.1727: The Morning on the Fourth Day in Paris

The morning on the fourth day to stay in Paris came. I'll leave the hotel shortly for the Musée Picasso where I've looked forward to visiting for a long time. I expect to encounter the essence of Picasso's works and himself. Paris, 09:31, Sunday, 3/3/2019

#### 3906.【パリ小旅行記】昨日購入した五冊の楽譜について

雨は止んだと思っていたのだが、まだ小雨が降っているようだ。ポツポツと雨が屋根に当たる音が聞こえる。

少しばかり日記を書き留めたら、ゆっくりとホテルを出発して街の楽譜屋に足を運びたい。昨日は、ラヴェル博物館を訪れた後に、パリ市内に戻ってきて、街の東部の楽譜屋“Woodbrass”に足を運んだ。

二時間弱ほど楽譜を吟味し、今の自分に響くものがあつた楽譜を五つほど購入した。まず関心を持ったのは、バロック時代のフランスの作曲家かつ音楽理論家であつた、ジャン＝フィリップ・ラモー(1683-1764)の楽譜、そして偶然にも誕生日が同じであるフランスの作曲家アンリ・ルモワヌ(1786-1854)の楽譜であつた。ラモーに関しては前々から関心を持っており、ルモワヌに関しては、その日に初めて知つた作曲家であつた。ルモワヌについて調べてみると、ピアノ教師として活動することと並行して、とりわけ教育的な作品を多数残していた作曲家のようだ。

今朝方に早速、ルモワヌの練習曲を参考にして二曲ほど曲を作つた。その他にも、ハープシコードの曲を多数作つたイタリアの作曲家ドメニコ・スカルラッティ(1685-1757)の楽譜も購入した。楽譜を眺めて直感的に思つたのは、ラモーと同時期に活躍したこの作曲家からも得ることが多いというものだつた。今の私は、少しずつ作曲技術の幅を広げようとしており、多様な時代の音楽から学べることは全て学びたいという気持ちを持っている。そうした思いから、ラモーやスカルラッティの楽譜を購入したのだと思う。

---

その他に購入したのは、「ロシア五人組」の一人であるロシアの作曲家モデスト・ムソルグスキー(1839-1881)の楽譜と、ユニークなものとしては神秘思想家のジョージ・グルジェフ(1866-1949)と彼の友人のロシアの作曲家であるトーマス・ド・ハートマン(1885-1956)が残した楽譜である。前者のムソルグスキーに関しては、そろそろロシアの作曲家に範を求めてみようという気持ちが前々から芽生えていたため、この機会にムソルグスキーの楽譜を購入した。今後は、ラフマニノフやチャイコフスキーなどの楽譜を購入したいと思う。

後者のグルジェフとド・ハートマンの楽譜は大変興味深く、それは何巻かにわたっているらしいが、私は書店に置かれていた第一巻を購入することにした。そこで取り上げられているのは、グルジェフとド・ハートマンが東洋を旅した際に集めてきた宗教音楽が元になって作られた数々の曲である。

私はバルトクに影響を受けて、民族音楽に関心を持ち、近い将来に東洋の音楽を参考にしながら作曲をしたいと思っていたところに、これまた偶然にもこの楽譜と出会うことができた。ド・ハートマンは、グルジェフの神秘思想に影響を受けており、そうした思想的影響を、この楽譜に収められている一連の曲の中に見ることができるだろう。今回のパリ滞在中にこの楽譜に範を求めて作曲する予定はないが、フローニンゲンに戻ってから、ゆっくりと東洋的な音楽についての探究を始めたいと思う。

購入した五冊以外にも、何冊か購入を迷うものがあった。一つは、スペインの作曲家であるマヌエル・デ・ファリャ(1876-1946)の楽譜である。今の私は、まだスペインの音楽に惹かれておらず、今後スペインを訪れ、感覚的にスペインを知ってからデ・ファリャの楽譜を購入の方が賢明だと判断した。もう一冊は、ラグタイム王と呼ばれた、アフリカ系アメリカ人の作曲家スコット・ジョプリン(1868-1917)の楽譜だ。

この楽譜は、ジャズピアノのコーナーに置かれており、ジャズピアノについても以前から関心を持っていたため、ジョプリンの楽譜を購入するかは最後まで悩んだ。ジョプリンは、ヨーロッパのクラシック音楽とアフリカ系アメリカ人のハーモニーとリズムを関連付ける音楽を探究していたらしく、ジョプリンもまた自己のルーツに根ざした音楽に関心を持っていたことがわかり、大変共感する。昨日は荷物の都合上、五冊しか楽譜を購入できなかったが、もし今日訪れる楽譜屋にジョプリンの楽譜があれば、この機会に購入してもいいかもしれない。パリ:2019/3/2(土)10:02

---

## 3907.【パリ小旅行記】Ariosoという楽譜専門店にて

パリ滞在の三日目がゆっくりと終わりに近づいている。少し前にホテルに戻り、つい先ほど入浴を終えて疲れを癒した。

今日はまず最初に、パリ市内のAriosoという楽譜専門店に向かった。ホテルを出た時には、幸いにも雨が止んでおり、少しばかり冷えるパリの街を散歩しながら街の景観を楽しんだ。

30分ほど歩くと、音楽関係の店が多く並ぶ一角に、Ariosoを見つけた。まず目に付いたのは、店の外にディスカウントで販売されている楽譜の数々だった。

私は店内に入る前に、まずはそこに置かれているピアノ曲の楽譜を全て確認した。確かに今朝のパリは幾分冷えていたが、30分ほどの散歩によって体が温まっていたことと、楽譜に対して強い関心を示していたことが重なり、外の寒さは一切気にならなかった。

しばらく楽譜を眺めていると、いくつか今の自分にとって必要な楽譜を発見することができ、それがかなりのディスカウントで購入できることを喜んだ。まずは五冊ほど店の外に置かれていた楽譜を選び出し、それを持って店の中に入った。

この楽譜専門店は、中古と新品の楽譜のどちらも豊富に揃えており、私の心は高鳴った。店内のピアノコーナーに行き、そこで五冊の楽譜を近くの机の上に置いて、そこから楽譜の本格的な吟味に入った。以前から注目をしていたニコライ・メネルのピアノ全集に関する楽譜や、オリヴィエ・メシヤンの楽譜に目が止まったが、今それらを購入する時期ではないと直感的に感じ、それらの楽譜を棚に戻した。メネルの曲を参考にする日は近いかと思うが、メシヤンに関してはもう少し遠い将来に参考にすることになりそうだ。とにかく豊富な楽譜に圧倒されながらも、作曲家の名前がアルファベット順に並べられた棚の一つ一つを確認していき、背表紙を見たときに惹きつけられるものがあつたものを本棚から取り出し、中身を確認するということを繰り返していた。

結局私は、昨日購入を悩んでいた、アフリカ系アメリカ人の作曲家スコット・ジョプリンのラグタイムのピアノ曲全集の楽譜を購入することにした。昨日、ロシアの作曲家モデスト・ムソルグスキーのピアノ曲の楽譜を購入したのだが、今日訪れた楽譜専門店には、ムソルグスキーのピアノ曲全集の楽譜

---

が置いてあった。しかもそれはディスカウントで販売されており、どのような曲が昨日購入した楽譜の中に収められているのかを覚えておらず、重なる曲があったとしても問題ないと思い、それを購入することにした。

先ほど調べてみると、昨日購入した楽譜の中に収められている曲は全て、今日購入した楽譜の中に収められていた。昨日購入した楽譜には、フランス語、ドイツ語、英語での解説文が掲載されており、資料価値は高い。一方、今日購入したものにはそうした解説がない。全ての曲が重なっていたことは残念だが、解説文を一読したら、今度一時帰国した際に、せっかくなので母にこの楽譜をプレゼントしようと思う。

それ以外には、この人生において幾つになっても新たなことを始めることができるということを私に教えてくれた、アレクサンドル・ボロディン(1833-1887:ボロディンは化学者として名を馳せており、30歳から作曲を始めた)が師事したミライ・バラキレフ(1837-1901)の楽譜、ロベルト・シューマンの楽譜(1810-1856)、フランスの作曲家シャルル＝ヴァランタン・アルカン(1813-1888)、ヨハネス・ブラームス(1833-1897)の楽譜、スペインの作曲家イサーク・アルベニス(1860-1909)、リヒャルト・シュトラウスの楽譜(1864-1949)、アンリ・コレ(1885-1951)の楽譜の合計13冊を購入した。

一冊一冊がしっかりとしたものであるため、13冊の楽譜はかなり重たく、レジに運ぶのも一苦勞であった。その数の楽譜を見て、優しい店主の中年女性が、「ディスカウントしますね」と笑みを浮かべながら述べてくれた。合計で100ユーロでいいとのことであり、私は店主にお礼を述べた。一冊あたり千円未満で購入できたことに大変満足している。これからすぐに、全ての楽譜の目次のページに、購入した店の名前と購入した日付を書き留めておきたい。パリ:2019/3/2(土) 18:27

### 3908.【パリ小旅行記】ドビュッシー博物館を訪れて

時刻は午後の六時半を迎えた。日中はパリをあちこちと歩き回っているため、日記を書く暇がなく、書き留めておきたいことが溢れ返っている状態であり、なかなか收拾がつかない。とりあえず、もう一つだけ日記を書いて、本日届けられたメールに返信をした後に夕食を摂り、その後にまた日記を書き留めておきたい。

---

午前中に、パリ市内の西部にある楽譜専門店Ariosoに行き、そこで昼食の時間まで楽譜を吟味していた。今日は13冊楽譜を購入し、昨日は5冊であった。楽譜を購入することを見越して、スーツケースのスペースを確保していて正解であった。今回のパリ旅行では、もうこれ以上楽譜を購入することはない。今回購入した18冊の楽譜は、今後の私の肥やしになってくれるだろう。これらの楽譜に寄り添ってもらいながら、再び日々作曲技術の向上に向けて修練をしていきたいと思う。

明日はいよいよ、国立ピカソ美術館を訪れる。そもそも今回パリに再び足を運ぼうと思ったのは、この美術館の存在を先日知ったからである。明日この美術館を訪れる予定であり、それは今回の旅のハイライトになるだろう。明日は開館の時刻に美術館に行き、昼食は美術館のレストランを活用したい。午後も気の済むまでゆつくりと作品を鑑賞したいと思う。ピカソの画集で何か良いものがあれば、ぜひそれを購入したいと思う。

今日は、楽譜屋近くにある日本食レストランで昼食を摂った。どこか見たことがある名前の店だと思っていたところ、そういえば一年半前の夏にコペンハーゲンを訪れた時に足を運んだ店だと思い出した。そこで昼食をゆつくり堪能した後、ドビュッシーの生家があるパリ西部の街サン・ジェルマン・アン・レーに向かった。パリの市内から郊外に向けて出発した列車からの景色は、どこか落ち着いた雰囲気を持っていた。

パリ市内の喧騒はあまり好きではないのだが、パリ郊外の落ち着きは大変好感を持てる。列車の窓からは、古びていながらも、こだわりのある個性的な家々の姿を眺めることができた。列車にしばらく揺られていると、目的地に到着した。駅から外に出てみると、昨日訪れたラヴェル博物館の周辺とはまた違う景色が広がっていた。一言で形容するのが実に難しいが、そこは落ち着いた観光地でありながら、歴史も感じさせてくれる街だと言えるかもしれない。昨日訪れた街の方が自然を身近に感じられるのだが、町全体の活気はそれほどない。一方、今日訪れた街は、自然はそれほど感じられないが、町全体に活気があり、しかもそれはパリ市内の活気とは異なり、実に落ち着いたものであった。

私は喉が渴いていたので、ドビュッシーの生家に立ち寄る前に、カフェに行き、そこでコーヒーを一杯飲むことにした。コーヒーを飲みながら作曲ノートを読み返していると、少しばかり眠気に襲われ

---

たので、10分ほど仮眠を取ることにした。仮眠から目覚めると、脳がすっきりしており、再び活動するのにふさわしい状態になったと実感した。そこでカフェを後にし、ドビュッシーの生家に向かった。

ドビュッシーの生家に到着すると、昨日訪れたラヴェルの家と同様に、実に小さな家にドビュッシーが住んでいたことがわかった。事前情報では、博物館の入館料は無料とのことであったが、入り口の看板に、大人は5ユーロとの表示があった。

いざ一階の案内所の扉を開けようとする、開かなかった。押しても引いても開くことはなく、おかしいなと思っていたところ、フランス語で書かれたドアの表示に目がいった。だが私はフランス語が読めなかったので、ちょうど目の前を通りかかろうとしているフランス人女性に英語で声をかけ、その表示がどういう意味かを教えてもらった。その方曰く、「通常は土日も開いているのだが、今は特別展示に向けての準備があり、中に入ることはできない」とのことであった。

その女性の方の話を聞く前から、薄々中に入れなことを感じていたのだが、案の定、今の時期は中に入れなとのことであった。公開されている二つの部屋を見ることができなくて残念であったが、私はしばらくドビュッシーの生家の前に佇んで、その周辺の雰囲気を感じていた。

ラヴェル博物館にせよ、ドビュッシー博物館にせよ、外観だけは見れたが、中に入ることができなかったというのは何か意味を持っているのかもしれない。パリ:2019/3/2(土) 18:52

### 3909.【パリ小旅行記】パリ滞在の四日目の朝に

時刻は午前八時を迎えた。パリ滞在の四日目が始まり、今日はいよいよ国立ピカソ美術館に行く。美術館はホテルから歩いて30分弱の距離であり、今改めて調べると開館は午前九時半とのことであった。今日はこの美術館に訪れることしか用事がないため、それほど早く美術館に行く必要はないので、美術館が開館する時間ぐらいにホテルを出発しようと思う。

今日でパリの滞在は四日目なのだが、この街で長く生活しているような感覚がある。欧州での生活を始めて以降、ヨーロッパの様々な国と地域に旅行に出かけ、そうしたことが影響をしてか、新たな土地への適応が速やかに行われるようになってきている気がする。もちろんそれは表面的な適応であり、

---

実際にそこで生活をしてみなければわからない葛藤を乗り越えてからもたらされる真の適応ではないことは確かだ。いずれにせよ、今は表面的な適応が行われているような状態にある。

ただし、やはりこの国は、隅々までフランス語で構築されているため、フランス語という言語空間に自己を投げ入れることは難しい。当然ながら、フランスでも英語が通じることは多いが、昨日の日本食レストランのように、中には英語がほとんどしゃべれない人がまだいる。そうした状況が依然としてフランス、しかもその中心であるパリにも残っている。そうしたことが、フランス語を話せない私にとって、この国との心理的な距離を深めることになっているように思う。

フランス語が支配的な言語空間に浸っていると、自分の中の日本語は完全に沈黙し、英語までもが麻痺するような感覚になるから不思議である。オランダではそのようなことを体験することはあまりなく、強いて挙げるとすれば、一年目の最初の頃にそのような体験をしていたかもしれない。オランダ語の基礎を学んだことによって、そうした感覚は徐々に薄れていったように記憶している。そうしたことを考えると、やはりその国の主要言語の基礎を学ぶことが、言語的な麻痺状態を改善してくれることにつながるのだろう。そのようなことをふと考えていた。

パリ滞在の四日目の朝は、驚いたことに、記憶に残る夢を見なかった。いつもはおぼろげながらも何かしらの夢を覚えているのだが、今日に関しては全く記憶にない。もしかすると、昨夜今後の生活地についてあれこれと考えていたことが睡眠の質に影響し、その結果として夢を見なかったのかもしれないと思う。いずれにせよ、こうした珍しい事態があったことを書き留めておく。幸いにも、この夏からの生活地をどこにするのかを決めることができたため、今夜は夢を見るのではないかと思う。

今から少しばかり作曲実践をして、一曲作ったら身支度をし、国立ピカソ美術館にゆっくりと向かいたい。パリ:2019/3/3(日)08:39

#### No.1728: In a Wintry Memory

The last day to stay in Paris is approaching the end. I'll come back to Groningen tomorrow and lead the same life as before. Paris, 21:50, Sunday, 3/3/2019

今日は午前中に国立ピカソ美術館に足を運んだ。幸いにも、ホテルを出発する時は雨が降っておらず、寒さも厳しくなく、歩くのには丁度良い気温であった。

ピカソ美術館に到着し、すぐにチケット売り場に向かったところ、今日はなんと無料で入館できる日のことであった。私はそれを狙って今日訪れたわけではないため、この偶然には嬉しく思った。

この美術館は、地下一階から地上階を含めると、合計で五階建ての建物である。美術館を訪れるまでは、もう少し大きな美術館だと思っていたのだが、五階建てとはいえ、中はそれほど広くはなかった。

所蔵されている作品は、もちろんピカソのものがメインだが、ピカソに影響を与えたルノワールやモジリアーニの作品なども所蔵されている。この美術館は、ピカソの作品をもっとも多く所蔵していることではあったが、印象としては多くの作品が所蔵されているとはそれほど思えなかった。

ピカソは偉大な画家であることは確かだと思うが、所蔵されている作品から何か喚起されるものがあつたかというそうではない。ピカソは、一生涯にわたって膨大な数の作品を残した点には大変感銘を受けるのだが、作品そのものに対しては、それほど感銘を受けていない自分がある。ピカソの作品の中に顕現されている美と自分の美的感覚が合致していないためにそうしたことが起きているのかもしれない。ピカソの作品を見ながら、全く画風の異なるモネの作品をぼんやりと思い出していた。

昨年の六月にロンドンのナショナルギャラリーに訪れた際に、私はモネの特別展示を見る機会に恵まれた。そこにはモネの傑作が多数展示されており、一つ一つの作品から私は、実に多くの刺激を受けていた。今日は残念ながら、そうした刺激はほとんどなかったように思う。もちろん、ピカソの作品に対しても、彼の作品の中に固有の美を見出し、多くの刺激を得る人もいることだろう。

だがピカソの作品は、モネの作品と比べて、理解するのが難しく、そこに現れているはずの美を汲み取るのが困難なものが多いように思う。そのようなことを考えていると、多くの人に美を実感させることのできるモネの作品の方が親切だと言うことができるかもしれない。玄人にしか理解できない美

---

と、絵画芸術の素人にも理解でいる美の双方には、違う価値があり、どちらも共に貴重なものではあるが、私はピカソの作品よりも、モネの作品を好む傾向にあるようだ。今日の美術館訪問は、そうしたことを改めて実感させてくれる体験を提供してくれた。

とはいえ、ピカソの芸術に全く関心がないかと言えばそうではなく、事実今日この美術館に訪れたように、ピカソの芸術家としての生き様や、ピカソがどのようにして絵画技術を高めていったのかは大いに興味がある。そうしたこともあり、美術館のギフトショップで、この美術館が出版しているピカソの画集を二冊ほど購入し、ピカソの生涯を描いたドキュメンタリーDVDを購入した。今日の夜に時間を作って、画集を眺め、DVDはフローニンゲンに帰ってから視聴したいと思う。パリ:2019/3/3(日)  
15:50

### 3911.【パリ小旅行記】ピカソのあり方から学ぶこと

時刻は午後八時を迎えた。これから日記をもう少し綴り、その後に作曲実践をしてから就寝に向かいたい。

明日は10:18にパリ北駅を出発する列車に乗ってスキポール空港駅まで向かう。そこで一度乗り換えをし、フローニンゲンに到着するのは午後四時ぐらいになるだろう。明日は午前九時半をめぐりにホテルのチェックアウトをし、パリ北駅でコーヒーと昼食を購入してから列車に乗りたいと思う。

本日訪れた国立ピカソ美術館の記憶を少しばかり辿っている。特に、ピカソが収集していた他の画家の作品について思い返していると、ルノワール、セザンヌ、ドガ、モジリアーニなどの作品があったのを覚えている。

美術館で購入した画集を眺めていると、ピカソは過去の偉大な画家のみならず、同時代の偉大な画家からも絶えず学びを得ていたということが書かれていた。ピカソは晩年においても学びを続け、自らの絵画制作技術を絶えず発達させることに積極的であったことが窺える。ピカソは膨大な絵画作品を残し続けたのみならず、絵画の探究をし続ける人間だったのだ。その点に、私も見習うべきことが多々ある。絶えず自ら作品を創出し続けていくのに合わせて、絶えず創造の探究をし続けていきたいという思いを新たにす。

---

明日からは再びフローニンゲンでの生活が始まる。探究活動と創造活動は不可分な関係をなしており、ここからはそれらの活動に本腰を入れていきたいと思う。言うまでもなくそれは、作曲に関する探究と創造だ。そうした探究と創造を通じて、人間が生きるとはどういったことなのか、人間発達とは何か、人間の霊性とはいかなるものなのかに関する理解を深めていく。

上記の事柄以外にもピカソに共感したこととしては、以前の日記で書き留めていた、創造活動は未知との遭遇であるという点をピカソも明確に認識していたことである。ピカソは、毎回絵を描き始める時に、無の境地に至る感覚があると述べている。

絵を描く前の段階においては、自分がどのような場所に向かっているのかわからないが、ひとたび絵画が出来上がると、自分がどこにいたのかを知るという興味深いことを述べていた。まさに創造活動は未知なるものへと向かっていくことなのだ。いや、そもそも未だ未知なるものが主体となって創造を開始しているという点において、二重の未知性を孕むのが創造活動の本質だと言えるかもしれない。本日訪れた美術館に所蔵されている作品からは直接喚起されるものは少なかったが、ピカソの言葉や生き様からは学ぶべきことが多かったように思う。

フローニンゲンに戻ってから、本日購入した画集とドキュメンタリーDVDを視聴することによって、ピカソの創造活動の秘密について少しずつ紐解いていきたいと思う。パリ:2019/3/3(日)20:18

### 3912.【パリ小旅行記】パリ滞在最終日に見た夢

いよいよパリ小旅行が終わりに近づいている。今、パリの街の上空は雲が覆っており、午前中には小雨が降る予報が出ている。幸いにも、宿泊先のホテルからパリ北駅までは歩いて数分の距離であるため、雨が降り始めてもそれほど苦勞することはないだろう。九時半過ぎにチェックアウトをし、10:18パリ北駅発のThalysに乗ってオランダに戻る。

パリ滞在の最終日の朝方には、印象深い夢をいくつか見た。一つは、私の内側には、まだ他者の期待に応えようとする自分がいるということを示唆するものであった。他者の期待に応えようとする現象は、キーガンの理論で言えば、単純に他者依存段階の特性とは限らず、それがどのような意味構造から生まれているかによって段階特性が変わる。つまり、他者の期待に応えるということそのもの

---

のもってして、他者依存段階だと断定することはできず、そうした行動を促す意味の差異に基づいて、他者の期待に応えようとする行動は多様な段階特性を持ちうるのである。

ただし、今朝方の夢に関して言えば、それは他者依存段階のそれが現れていたと言えるかもしれない。夢の中で私は、進路の分岐点に差し掛かっており、ある一つの道が閉ざされ、もう一方の道を歩いていくことを両親に伝えた。一つの道が閉ざされたことに対して、両親は残念がっており、二人の表情を見ていると、こちらもどこか残念な気持ちになってしまった。とはいえ、私自身はどちらの選択肢であったとしても、自分の人生において意味があると確信していたため、両親の残念がる表情から喚起された残念な気持ちを振り切り、もう一つの道を歩くことを決心した。

最初の夢はそのような内容だった。どうやら自分の内側には依然として、両親の期待に応えようとする発達段階の自己の側面が残っているようだ。この側面は、積み残した発達課題の一種かもしれない。そもそも、親というものは子供に対して何らかの期待をする性質を持っているのかもしれない。さらにはそうした期待というの、ある側面においては存在している現象だと言えるが、別の側面から見れば、それは単なる虚構の産物だと見なすこともできる。

他者の期待に応えようとする自己がこの点を認識することによって、徐々に発達課題を乗り越えていくのではないかと思う。夢の中の私は、両親が築き上げた幻想的な期待に影響を受けていたことが改めてわかる。

この夢が終わった時、一度目を覚ました。時刻を確認すると午前五時であった。その時に、不思議なことに、両親の期待に応えようとする自己が幾分解放感を感じているようだった。夢を見て、目覚めた後にその夢について少しばかり回想していたことによって、何かしらの治癒が生じたのかもしれない。目覚めたのが五時であったこともあり、私はもう少し眠ることにした。すると、そこでもまた夢を見た。

次の夢の中では、日本の商店街で、ある二人組の芸人がロケを行っていた。ロケの内容は、二人の芸人が牛丼を食い逃げして成功するのかどうかというものだった。二人組の芸人の一方は、幾分肥満体質であり、あまり運動ができるとは思えないような体型をしていた。ちょうど私は、その商店街を俯瞰しながら見る存在として空中にいた。その肥満体型の芸人が牛丼を食べ、お金を払わずに

---

店から走って逃げ出すと、店員の若い女性がすごいスピードで後を追いかけて、その芸人はすぐに捕まってしまった。するとそこで罰ゲームとして、その芸人は商店街の路上で歌を歌わせられることになった。そこで夢の場面が変わった。パリ:2019/3/4(月)08:16

#### No.1729: Return to Winter

I came back to Groningen from Paris. Groningen is colder than Paris, and it seems to return to winter. Groningen, 18:32, Monday, 3/4/2019

### 3913.【パリ小旅行記】今朝方の夢の続き

時刻は午前八時半を迎えつつある。宿泊先のホテルは、パリ北駅からの近くにあり、駅へのアクセスは便利であるが、周辺は都会の喧騒に満たされている。普段私は、小鳥の鳴き声が聞こえてくるような静かな場所で生活をしているため、今回パリ旅行で滞在した周辺の環境は、いい意味で私の中に異物を投げかけてくれる。そうした環境での生活も今日で最後となる。

パリでの滞在を締めくくべく、これから一曲ほど作り、そこから出発に向けた準備を始めたい。荷物をスーツケースに詰めるだけなので、ほとんど時間はかからないだろう。忘れ物には注意し、荷物を積み終えたら、09:30ではなく、09:40をめどにホテルをチェックアウトしたい。

今、今朝方見ていた最後の夢について振り返っている。夢の中で私は、ヨーロッパのある街の市場を散策していた。天井のある建物の中で市場が催されており、欧州の各国からもたらされたであろう実に様々な特産品が市場に並べられていた。市場の一角に到着すると、そこで何人かの日本人が話をしていた。彼らに近づいてみると、どうやらクイズをしているようだった。私は彼らがクイズをしている様子を観察することにし、彼らの側に立ってじっとしていた。

ある時、クイズの出題者の中年男性は、権威を持っているようであり、クイズに回答する人たちが少しばかり遠慮しているように思えた。その権威的な人物がある問題を出題し、一人の女性がそれに答えた。彼女の手元には一枚の紙があり、クイズの問題は国語の読解問題のようであり、手元の紙に記載されている文章のどこかに回答があるようだった。私はその時、出題者の問題の出し方があまり良くないと思った。受け取り方によっては、二つの回答が存在しうることに気づいたのである。ク

---

イズに回答しようとしている女性は、少しばかり遠慮がちに答えを述べた。彼女の答えは、ある段落の一文の前半部分から引っ張ってきたものだった。彼女の答えに対して、出題者は「不正解」と述べた。それを聞いた女性は、少しばかり落胆の表情を浮かべていた。

クイズの出題者はすぐに正解を述べた。なにやら正解は、彼女が選択した文章の前半部分ではなく、後半部分に記載されている二つの地名だった。やはり私はその正解に納得できず、問題の出題の仕方がおかしいと思い、それをどうしても指摘したくなっていた。というのも、出題の仕方が悪かったにもかかわらず、権威を持ったクイズの出題者が彼女を蔑むような嫌味を二、三述べていたからだ。

そこで私はなぜだか、クイズが行なわれている場所の向こう側にいた、現在協働プロジェクトを一緒に進めている若い方を大きな声で呼び、「今のクイズの問題にフォローしてもらえますか」と述べた。私が協働者の方を呼ぶと、その方は消えてしまった。そのため、私自らがその問題のフォローをすることにした。端的に言えば、クイズの出題者の面子をつぶすことなく、それでいて、クイズに回答した女性の答えも正解であるということを証明しようとしたのである。

私は二人の気持ちを汲み取りながら、先ほどの出題の仕方であれば、女性の回答が正しく、仮に言葉を付け足して主題していれば、出題者の回答が正しいと述べた。すると、二人とも納得の表情をしており、出題者は、出題の仕方が悪かったと女性に謝り、彼女は自分の回答も正解であったことを嬉しがっているようだった。二人のそうした様子を見届けた後、私は市場の中を再び散策することにした。市場を歩く自分の姿勢は、背筋が伸びており、何か堂々とした様子であった。パリ:2019/3/4(月)08:43

#### No.1730: The Second Hand of Tomorrow

Since I have fatigue caused by travel, I'll go to bed shortly. Groningen, 21:35, Monday, 3/4/2019

### 3914. 【パリ小旅行記】 パリで見た光と闇

つい先ほどパリ北駅を出発し、列車はスキポール空港に向かっている。今乗車しているThalysは、外見はそれほど綺麗ではないが、内装はとても綺麗で落ち着いている。

---

先ほど、パリ近郊は少し小雨が降っていたが、今はそれが止んだ。車窓の外にはのどかな田園風景が広がっている。おそらくフランスの真の良さというのは、パリの喧騒の中にあるのではなく、こうした郊外の落ち着いた環境の中にあるのだと思う。そうした良さは、パリの都市部だけを観光しては決して見えてくることはなく、このような郊外に住んでみる必要があるのかもしれない。

ふと、数日前にラヴェル博物館を訪れた帰りの出来事を思い出した。あれは、途中の乗り換え駅でのことだったと記憶している。乗り換えをするための地下鉄駅のプラットフォームに到着すると、どこからともなく音楽が聞こえてきて、遠くの方に人だかりができているのを見かけた。そちらの方に近寄っていくと、アフリカ系フランス人の男性が、プラットフォームの上でギターを演奏しながら歌を歌っていた。

彼の身なりは整っており、足元には宣伝用の小さな看板のようなものがあつた。プラットフォームの上で列車を待っている人たちのほぼ全員が彼の方に視線を向けて、彼の演奏に聴き入っていた。心地良いリズムとメロディーに合わせた彼の歌声は、列車を待っている人々の心を惹きつけていた。

その男性の真正面に、フランス人の家族がいて、小さな女の子が音楽に合わせて踊りを踊っている姿はととても可愛らしかった。わずか三分ほどの時間であつたが、楽しいひと時を過ごさせてもらった。私と同じようなことを思っていた人々は、彼の足元にある箱にお礼のチップを入れていった。私も十分に演奏を楽しませてもらい、音楽を愛する者としてチップを箱の中にそっと入れた。ギターを弾きながら歌を歌っている彼は、私に「Merci」と笑顔でお礼を述べた。そのような出来事をふと思い出した。この件を通じて、私は音楽の素晴らしさ、そして音楽の持つ力を改めて実感することになった。

非常にシンプルなことなのだが、音楽は人々の人生に彩りを添え、豊かな時間を過ごさせてくれる力を持っている。駅のプラットフォームで人々の心はその音楽を中心として一つになっている実感があつた。もしかすると、それは音楽以外ではなしえなかつたことなのではないかと思う。

今回パリを訪れてみて実感したのは、フランスの情勢はあまり良くないのか、道端にはマシンガンを持った警官が立っていたり、パリ北駅の中にもマシンガンを持った警官が巡回していた。そうした銃器を見て、随分と物騒であると思つたし、そうした銃器を持って警備をしなければならないほどの情勢なのだと思つた。

---

相変わらずパリの市内には浮浪者がいて、さらには難民の人たちの姿を多く見かけた。また昨日は、パリの中心街で、アルジェリア人の集団デモが行われていた。アルジェリアの国旗を持った人たち、中には大きな国旗をマントのように羽織りながらデモの会場に向かっている人たちの姿を見かけた。

パリの地下鉄駅での音楽体験は、間違いなく人間の良き姿を見たように思えた。一方で、街中の浮浪者や武装した警官、そしてデモを見たときには、そこに人間社会の問題と未成熟さを見たように思えた。パリ:2019/3/4(月)10:55

#### No.1731: A Quiet Start

We can start to live our life afresh from anytime, can't we? Groningen, 10:15, Tuesday,  
3/5/2019

### 3915.【パリ小旅行記】オランダでの滞在延長

気がつけば列車に乗ってから二時間が経っており、つい今しがた昼食を摂り終えた。あと一時間ほどでスキポール空港駅に到着する。

ちょうど今、ベルギーのアントワープ駅に到着した。結局今回の旅ではベルギーを訪れることはなかったもので、またいつかゆつくりとベルギーを訪れたいと思う。

フローニンゲンもパリも、先週までは天気恵まれ、春の様相を呈していたが、今週は気温が下がり、天気が崩れる日が続く。今日の夕方にフローニンゲンに戻ったら、行きつけのチーズ屋でチーズとナッツ類を購入し、自宅に戻ってから荷物を置いたら、近所のスーパーに数日分の食料を買いに行こうと思う。

この夏からの生活地について、先日ある決断をした。結局私は、オランダでもう数年間生活をすることにした。パリに滞在中にHGSEから連絡があり、芸術教育プログラムの面接にまで進んだものの、結局今回は縁がなかった。また、スイスのドルナッハにある精神科学自由大学でシュタイナーの思想を学ぶことに関しても、まだその時期ではないように思っていたため、プログラムに応募すらしなかった。そうしたこともあり、アメリカでもスイスでもなく、オランダに残るという選択をした。ただし、オ

---

---

ランダでの四年目からの生活はフローニンゲンではなく、オランダの平和と司法の街デン・ハーグで営むことにした。

最初はアムステルダム郊外やロッテルダムに住むことを考えていたが、以前デン・ハーグを訪れた際に、その落ち着いた街並みに惹かれるものがあり、街の中心から数キロほどで海(北海)にアクセスできることも私にとっては魅力的であった。

デン・ハーグには日本人の友人が住んでおり、アムステルダム郊外にも知人の方が住んでいるため、時々実際に会って話しをすることもできる。この三年間は、ある意味、本当に孤独の中で日々の生活を送っていた。もちろん、そうした孤独は自分にとって必要なものであったが、ここ最近はそのような孤独とは別種の孤独を必要としていることに気づき始めている。それは感覚的なものであり、説明は難しい。一つ言えることは、これからオランダで生活を続けていくにあたっては、もう少し外で人と会って話をする機会を設け、その一方でこれまでどおり、自分の時間を大切にしながら探究活動と創造活動に打ち込みたいという思いがある。

以前から、いつか必ずオランダで欧州永住権を取得しようと考えていた。その基準としては、オランダで継続して五年間生活をするのが要求されている。私はすでに三年間ほどオランダで生活しており、欧州永住権の取得まで残り二年である。仮にこの夏からアメリカやスイスに移住してしまうと、これまでの三年間の滞在は清算されてしまうため、今回オランダに残れたことは、欧州永住権の獲得という観点から見れば幸運だったのかもしれない。

調べてみると、もしかしたらフローニンゲン大学の大学院に留学をしていた最初の二年間は、半年の一年としてカウントされ、Search Yearを活用した今年一年間を合計すると、まだ二年ほどの滞在だと見なされる可能性がある。そうすると、五年の滞在条件を満たすためには、あと三年間ほどオランダで生活をする必要がある。

今のところ、スキポール空港に列車で30分ほどでアクセスできるデン・ハーグで長く生活をしていこうと思う。早速家の候補を探し、平和宮やマウリッツハイス美術館の直ぐ近くに良い物件を見つけた。周りの環境はフローニンゲンと同じく静かそうであり、直ぐ近くに公園もあり、海までも近い。部屋の広さもちょうど良く、テーブルと椅子がついたバルコニーがあることも魅力的だ。

---

二年前にデン・ハーグを訪れた時に執筆した日記の中で、私が小学生の頃、いつかデン・ハーグで仕事をするを考えており(当時は国際司法裁判所で働こうと考えていた)、それは20年ほどの時を経て、このような形で実現することになった。

ここからオランダで滞在をしていくために、起業家ビザを申請しようと思う。デン・ハーグでは、引き続きこれまでと同様に、日本企業との協働プロジェクトに従事しながら、オランダの教育を研究し、それを日本に紹介することも行っていこうかと考えている。ここから少なくとも三年間は、デン・ハーグに落ち着き、探究活動と創造活動をさらに本格的に進めていきたいと思う。パリ:2019/3/4(月)

13:00

#### No.1732: Insubstantiality

I've been always obsessed with an inquiry of what kinds of meaning we have when we live our transient life. Groningen, 18:00, Tuesday, 3/5/2019

### 3916.【パリ小旅行記】スキポール空港にて

つい先ほど、スキポール空港駅に到着した。フローニンゲンまで乗り換えなしで行ける列車がやってくるまであと30分ほどあったので、空港内の椅子に腰掛けて今この日記を書いている。

今回の旅の最中にもずっと感じていたことであるが、絶えず気づきの意識に満たされた自分がいる。とりわけ覚醒中においては、自分の内外で起こっていることの全てに対して強く自覚的な自分がある。

今日のスキポール空港駅周辺はとても天気が良い。天気予報では午後までは雨が降る予定であったが、雨はすっかり止み、今は晴れ間が顔を覗かせている。オランダを出発した数日前に比べて、外の空気は冷たいようであり、少し冬に戻ったかのような気温だ。

先ほどの日記の中で、この夏からはオランダに残って生活をしていくことについて書き留めていたように思う。ただし、フローニンゲンに残るのではなく、一旦ここで北オランダでの生活に区切りをつけて、南オランダのデン・ハーグで新たな生活を始めようと思う。デン・ハーグでの家にはこだわり、フ

---

ローニンゲンの家と同様に、とにかく静かな環境で生活を営んでいこうと思う。そうした静かな環境の中で、自らの取り組みを前に進めていく。

日本企業との協働プロジェクト、人間発達に関する探究活動、そして日記の執筆や作曲といった創造活動に対して、これまで以上に献身したいと思う。フローニンゲンでの最初の二年間は、大学院に所属していたこともあり、それらの活動のうち、探究活動には力を入れることができたが、残りの活動についてはそれほど力を入れることができなかった。

今回、オランダに残って生活を続けることを決めたことに伴い、それらの活動の全てに対して、これまで以上にエネルギーを捧げることができるだろう。今回、オランダに残って生活をするようになったのは、オランダという国に恩返しをする必要があることも一因だろう。私はオランダ政府から奨学金を得る形でフローニンゲン大学で学ぶ機会を得た。やはり私がこの国にやってきたのは何かの縁であり、この縁を大切にしたいと思う。この夏からさらに滞在をするためには、起業家ビザが必要となり、その申請に向けた準備を五月の終わり頃から始めようと思う。

オランダで起業するといっても、それは個人事業の形であり、会社を設立するというようなものではない。今のところ、発達科学、教育科学、教育哲学の観点からオランダの教育について日本に紹介するような事業内容にしようかと考えている。その事業を大きくする予定も収益を得るつもりもない。事業を通じて得られた利益を税金としてオランダに還元していくこと、さらには日本とオランダのつながりを深めるようなきっかけを当該事業を通じて作っていければと思う。

メインの仕事は引き続き日本企業との協働プロジェクトになるため、起業家ビザで申請する事業はほぼ慈善活動のような形でいいように思う。二年後に滞在期間をさらに五年ほど延長するための最低限の収益だけを確保できるようにしておけばいいだろう。

オランダにはユニークな学校が多く、それらの教育的な枠組みは日本でも紹介されつつあるが、それらを自分の専門の観点から紹介することができればと思う。そしてそれらを単に紹介するだけではなく、日本の教育をより良いものにしていくための実践にもつなげていきたいと思う。オランダ在住の知人の方とこれから少しずつ密に協働をし、教育関係の仕事をしていきたいと思う。スキポール空港:2019/3/4(月)13:51

---

### 3917. パリから戻ってきた夜の夢

パリ旅行からフローニンゲンに戻ってきて一夜が明けた。昨日は、夕方にフローニンゲンに戻ってきてみると、パリよりも寒く、冬へ逆戻りしてしまったかのように感じた。

自宅に戻る途中で、行きつけのチーズ屋に立ち寄って店主と話をする、先週までの暖かさは異常であり、再び通常の寒さに戻ったとのことであった。フローニンゲンに戻ってきて実感したことは、まずは寒さであったが、それ以外に実感したことは、やはりこの街の落ち着きである。

昨夜、早速二曲ほど曲を作っている最中に、外の世界の静かさを実感していた。また、就寝のためにベッドで仰向けになった瞬間にも、大いなる静かさを感じた。直近数日間でパリの中心部に滞在していた時には感じられなかった静けさを感じる事ができた。やはり私は、こうした静かさの中で落ち着いた生活をする事が性に合っているようだ。ここからまた、デン・ハーグに引っ越すまでフローニンゲンで静かな生活を送りたい。

パリから戻ってきて最初の夜に印象的な夢を見た。夢の中で私は、実際に通っていた小学校の校舎の中にいた。そこは高学年用の校舎であり、私は三階の教室にいた。授業に参加していたわけではなく、授業参観のような形でそこにいた。

すると、中庭の方から子供たちの元気の良い声が聞こえてきた。その声に続けて、小中学校時代の友人(YK)の声が聞こえてきた。どうやら彼は今、教育実習を母校で行っているようだった。友人の懐かしい声が聞こえてきたので、私は彼がいる中庭に降りていこうとした。すると、他の教室の教師の男性が、「うるさい！」と中庭の子供たちに怒鳴り声を上げた。

確かに、他の教室では授業が行われており、中庭で行なわれている課外授業に参加している子供たちの声は元気が良かったが、単純にうるさいと述べてしまって、子供たちの活動エネルギーを抑圧してしまうのは教育上どうかと思った。エネルギーを発散すべき場所ではエネルギーを発散することの方が、それを抑圧してしまうよりもずっと健全だと私は思っていた。

---

中庭に降りてみると、多くの子供たちが元気いっぱい交流をしていた。友人は私の存在にすぐに気付き、話しかけてきた。何の授業をしているのか私も気になったので、彼に質問を試みることにした。すると、野球をしながらある科目の内容を教えるという非常にユニークな授業だった。

先ほど、他の教師が「うるさい！」と怒鳴っていたが、それを気にする必要などない、と私は彼に伝えた。昔から、彼は私と同じような考え方を持っており、子供を育てる方針に関しても似た考えを持っていることが改めてわかった。すると彼の方から一つ提案があった。

**友人:**「来週の授業の時に、ゲスト講師として授業を受け持ってくれない？」

**私:**「自分でよければぜひ。それは何の授業？」

**友人:**「算数と作曲をお願いしたいんだ」

友人のその提案を聞いた時、以前小学生に算数を教えていた経験があるため、算数なら問題ないと思っただけ、作曲を子供たちに教えたことなどなかったため、その点については懸念があった。とはいえ、作曲を子供たちに教えるのは面白そうだと思う、彼の提案を引き受けることにした。

中庭から再び三階の教室に向けて階段を上っている時に、どうやって作曲を教えるかを頭の中で考えていた。すると脳裏に鍵盤が浮かび上がり、簡単なメロディーを作る方法に関して模擬レクチャーのようなことを自分で行っていた。また、「和音」という概念をいかに伝えるかに関して、「好きな人と一緒にいると楽しいよね」という比喻を用いながら説明する案が良さそうだと考えていた。フローニンゲン:2019/3/5(火)09:03

### No.1733: A Perplexing Garden

This reality might be a perplexing garden. It seems to me that people are just allowed to live there. Groningen, 21:20, Tuesday, 3/5/2019

パリから戻ってきての初日がゆっくと進んで行く。今日は午後から、かかりつけの美容師のメルヴィンに髪を切ってもらおう。早ければ五月からハーグに引っ越しをするかもしれない、それを考えると、メルヴィンに髪を切ってもらえるのは後わずかなのかもしれないと思う。ハーグへの引っ越しが正式に決まり次第、メルヴィンにはすぐに連絡をしようと思う。

今日のフローニンゲンの最高気温は10度であり、最低気温は4度である。今週末からは最高気温と最低気温ともにさらに気温が下がるようだ。

午前中にふと、人生はいつからでも新たなものとして生きられるのではないだろうかということを考えていた。人生は常に新たな出発の連続であり、それを考えると、今日今この瞬間から人生を新たなものとして生きることは十分に可能だろう。

人生に新たな意味を付与することができた瞬間に、新たな人生が始まる。デン・ハーグでの生活を正式に始めることになれば、そこから私はまた、新たな人生を送ることになるだろう。

確かに今回も引っ越しをすることになるが、デン・ハーグではできるだけ長く生活をしたいと思う。ここ最近、そろそろどこかに落ち着いて生活を営んでもいいのではないかと思いつめている。以前の日記で述べたように、確かに私の魂には遍歴性があるが、ここあたりで幾分落ち着く必要があることを魂も感じているようなのだ。

デン・ハーグでは、フローニンゲンでの落ち着いた生活以上に平穏な生活を送れるような気がしている。そこには平穏さと共に、探究活動と創造活動に従事する熱気があるはずだ。

私は学術機関に所属して研究を続けることのできる人間ではなく、これからも在野の研究者として活動を続けていこうと思う。研究に関しては緩やかに継続させていき、創造的狂気に関しては一気にそれを解放させたいと思う。数日前にパリの駅で見たあのアフリカ系フランス人音楽家のように、人々の人生に彩りを添える音楽を創出したいと思う。私は決して職業作曲家ではなく、今後も日曜作曲家として曲を作っていくことになるだろう。

---

決して大作など作る必要はない。簡素な曲を通じても、いや簡素であるからこそ、人々の人生にそつと彩りを添えることができるのではないか。窓から見える白い雲を眺めながら、そのようなことを考える。

デン・ハーグに引っ越しをしてしばらくは、毎日一時間ぐらい、あれこれとデン・ハーグの街を散策したいと思う。毎回違うルートで散歩をし、デン・ハーグの街をよく知りたいと思う。

昨日よりパリから戻ってきたことに伴って、食生活の見直しをし始めた。手荒れのせいもあり、ここ数ヶ月は自炊をすることを控えていたが、昨日から料理を作ることを再開した。とりわけ現在注目しているのは地中海料理である。豚肉や牛肉を食べることは極力控え、魚をメインにした食事を続けていこうと思う。

昨日から、これまで以上に果物や野菜を摂るようにし、乳製品を控えながら、パスタを食べる食事に切り替えた。パリの旅行中に乳製品を控え、魚を中心に偏りなく様々なものを食べるようにしていると、手荒れが回復し始めたことをもって、これまでの食事のあり方を真剣に見直すことにした。

これまでチーズを毎日食べ、ヨーグルトを毎日飲んでいただけだが、乳製品を取り過ぎていた可能性があることによりやく気付き、昨日よりこれまで以上に食に気をつけるようにし始めた。食は心身に大きな影響を与えることを考えると、食についても研究を始めたいという思いが湧いている。フローニンゲン:2019/3/5(火)11:21

#### No.1734: A Transitional Sound

The third day since I came back from Paris has begun. Looking at street trees, I noticed that they turned fresh green slightly. Groningen, 09:31, Wednesday, 3/6/2019

### 3919. 喪失感と人間発達

昨日の天気予報とは異なり、今日は晴天に恵まれている。確かに白い雲の塊が空に浮かんでいるのが見えるが、それは不気味な雨雲ではない。太陽の光がフローニンゲンを優しく包んでいる。

---

昨日までのパリ旅行の最中に、いろいろと雑多なことを考えていた。それらは全てメモ書きとして残しているだけであり、文章の形となっていない。それらを少しずつ文章の形にしていくことが、旅から戻ってきてまず着手したい事柄である。

先ほどの日記で書き留めていたように、私たちはどのような瞬間からでも、人生に新たな意味を付与することができる。ロシアの発達心理学者ヴィゴツキーの考え方を採用すれば、意味とは参照されるものであり、それは個人の感覚から生まれる文脈によって生起するものである。

人生の意味を再構築するためには、自分の内側の感覚そのものを再構築することが求められることがわかる。それでは、感覚の再構築はどのようにして起こるのだろうか？おそらくそれは、人為的には成し得ないのではないかと思う。感覚そのものを変容させるためには、自己そのものの変容が要求される。それは長大な時間をかけて緩やかに実現されていくものだ。

そのようなことを考えると、感覚の変容には時間がかかり、そうであれば、意味を再構築することにも必然的に長大な時間を要するかのように見える。確かに、感覚をマクロに変容させていくには長大な時間がかかるが、ミクロな変容であれば、それは絶えずいかなる瞬間においても行なわれている。そうしたミクロな変容に意識を当てること。そこに見出された感覚的な変化を元にして、人生の意味を新たに紡ぎ出していくこと。そうしたことを絶えず行っていきたい。

パリの旅行中にふと、これまで仮に日本に一時帰国する際には、年末年始がほとんどであったが、これからはもう少し季節の良い時期に戻ってもいいのではないかと考えていた。昨年年末年始は日本に一時帰国することができなかつたため、今年は季節の良い秋にでも二週間ほど日本に戻ろうかと思っている。その際には、神保町にある音楽関連の古書店を巡りたいと思う。そこで音楽理論や作曲理論に関する日本語の専門書を購入したい。

パリを旅している中で、改めて死という現象について関心の矢が向かっていた。その主題に付随して、人はいかようにして喪失感を感じ、それをいかようにして乗り越えていくのかに関心が向かい始めた。そのテーマについては、グリーフセラピーの理論が参考になるかもしれない。何かを喪失するというのは、大切な人を失うという体験のみならず、私たちの日常生活には形を変えて同種の体験が溢れている。

---

大きなライフイベントの類には、仮にそれが結婚や出産などの肯定的なものであったとしても、喪失感をもたらす得る何かしらの余地が含まれているように思う。今まさに私は、この三年間生活してきたフローニンゲンを離れ、新たな場所で生活を送ろうとしている。

フローニンゲンを離れるということそのものが、やはり私に大きな喪失感をもたらしている。この喪失感の正体と、それとどのように向き合っていくのか、そして喪失感を乗り越えた後の自己はいかように変貌を遂げるのかに大きな関心を寄せている。この主題はまさに人間発達と密接に関係したものである。フローニンゲン:2019/3/5(火) 12:07

#### No.1735: A Swan on the Surface of a Lake

The sky looks like a lake above which a swan is flying. Groningen, 12:09, Wednesday, 3/6/2019

### 3920. 岐路

時刻は午後の四時半を迎えた。つい先ほど、フローニンゲンの中心街から戻ってきた。

今日は確かに気温が低かったが、天気恵まれ、太陽の優しい光が一日を通して降り注いでいた。昼食を摂ってしばらくしてから、かかりつけの美容師のメルヴィンのところへ足を運んだ。今日メルヴィンとの話に花が咲き、終始楽しい時間を過ごさせてもらった。

店に入ると、いつものように握手を交わし、ダブルエスプレッソを一杯ほどもらった。数ヶ月前にメルヴィンの店がオープンした時に祝いの品を持って行こうと思っていたのだが、毎回それを忘れており、今日それを渡すことができた。それは、メルヴィンの店にこれからも善き人々が絶えずやってくることを願った品である。メルヴィンはそれを嬉しそうに受け取り、早速店内に飾ってくれた。

今日もいつもと同じように一時間ほどの時間を取ってもらい、ゆっくりと会話をしながら髪を切ってもらった。メルヴィンが以前働いていた店に最初に訪れたのは、今からもう三年前のことである。その時には別の美容師に髪を切ってもらっていたのだが、彼が燃え尽き症候群になってしまい、その後担当してもらった美容師は独立をし、そこからメルヴィンとの縁が生まれた。そうしたことを考えると、メルヴィンとの付き合いはかれこれ一年ほどになるだろうか。

---

私はフローニンゲンにやってきて、大学院で二年間ほど学術的な研究に従事していたが、そこでの学びよりも、メルヴィンとの会話から得られた学びの方が多いと確信している。今日の会話をもって、それが完全な確信に変わった。

オランダでの三年間の中で、人生とは何か、生きるとは何か、人間がなす仕事とは何かについて、誰から一番学んだのかというと、それは間違いなくメルヴィンだろうと思う。そしておそらく、私が成人になって以降に生きている人間と会話したことの中で、メルヴィンとの会話以上に感化されるものはなかったように思う。

私に大きな影響を与えてくれたメルヴィンに髪を切ってもらうことも、残り少なくなってきた。今日は、デン・ハーグに引っ越しをすることについてメルヴィンに伝えた。デン・ハーグに行ってもぜひメルヴィンに髪を切ってもらいたいところだが、デン・ハーグからフローニンゲンまでは電車で片道三時間弱かかる。仮にデン・ハーグに引っ越しても、半年に一回か、一年に一回はメルヴィンに髪を切ってもらおうかと考えている。

本日のメルヴィンとの会話を改めて振り返っていると、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの言葉を思い出す。私たちは、考えるために生まれてきたのではなく、関係を持つために生まれてきたのだ、というものだ。

先日までのパリの旅行中に、いかにこの社会の中で他者と関係を結びながら仕事をし、生きていくかということについて何度も考えさせられていた。ここ最近では、充実感や幸福感というものが、自分の内側に閉じこもる形で生まれるものではなく、他者とのつながりの感覚を通じて生まれるものに変化を遂げつつある。

以前であれば、日々の探究活動と創造活動そのものの中に充実感や幸福感を見出していたが、今はそうした活動の中に閉じない形でそれらの感覚が生み出されつつあることを感じる。今、私はこの人生において、他者との関係性の網の目の中で何を成していくかを再度考える岐路に立たされている。

人間は他者や社会と関係を持つために生まれきたということを起点に、これから自分にできることはどういったことなのか、自分は何をすることを引き受けて日々生かされているのかを改めて深く考え

---

---

る必要がある。今日のメルヴィンとの会話は、そのようなことを考えさせてくれるきっかけとなった。フ  
ローニンゲン:2019/3/5(火)17:04

No.1736: A Landscape of a Suburb of Paris

I was in a memory of a landscape of a suburb of Paris, when I noticed it. Groningen, 17:39,  
Wednesday, 3/6/2019